

優秀賞

母と私

山口県 山口県立徳山高等学校二年 松村 佳奈

「ありがとう。」

そうやって母にこの言葉を素直に言えるようになったのは最近のこと。この言葉を言えるようになるまで、すごく時間がかかったな。

母は私が中学二年生の時に離婚した。そして、シングルマザーになった。私たちは新しい場所に移り、祖父と祖母と同居することになった。祖父母と母、姉、私、妹の家族。何事もなく、新しい家族と新しい場所で暮らしていけるだろうと思っていた。私は、あまり人見知りしない性格ですぐ学校に慣れ、友達もでき、部活も始めた。母も、家の近所で働き始めた。順調だった新しい生活も、少しずつ変化を見せるようになった。祖父母との生活に慣れていなかった私達は、今まで何も気にならなかった事を怒られるようになったり、考え方の違いがあったりして対立するようになった。母は、責任感が強い性格より、私達に苦労させたくなかったのであるう、仕事も家のことも重なってストレスと疲れがたまり、家ではイライラしていることがほとんどだった。私も自分のこと

で精一杯で母のことなど心配する余裕がなく、むしろ、そんな母のことを面倒臭い、うざい、とさえ思っていた。どんなに疲れていても、母は決して家事をおろそかにせず、食事は栄養満点の手作りだった。

私は部活が忙しくなった。母は私の試合があっても、仕事があって応援に来てくれることがあまりなかった。仕事で忙しいからとは頭では分かっているも、周りの友達を見ると、お父さんお母さんが来ていてうらやましかった。そして、つい言ってしまった。

「次の県大会、どうせ来れないでしょ。」
と。言った後すぐ後悔した。母の姿は毎日一番近くで見ているのに、最低なことを言ってしまった。それからしばらくして、母が職場を変えたと言ってきた。母は、試合の送迎や応援ができなくなるからと週末が休みの職場へと移ってくれた。こんな母親はなかなかいないだろう。しかし、また私は言ってしまった。受験期で思うようにいかず、イライラしていた時に、本当に小さな事を言われて、カッとなり、

「子供なんか産まなきゃ良かったじゃん！」

最悪だ。こんなこと言うつもりじゃなかった。自分の心の小ささに泣いてしまった。その晩、私は初めて母が泣いている姿を見た。ビール片手に床に座りこんで泣いていた母の背中が、小さく、弱々しかった。環境が変わって一番しんどい思いをしているのは母なのに。また、母を苦しめてしまった。次の日の朝、私は気まずい雰囲気はどうしようと思っていたが、母は何事もなかった様にいつも通り朝ごはんを用意してくれていた。嬉しかった。本当に嬉しかった。いつもの味噌汁もおいしくて温かかった。もう絶対に言わない、と決めた。

私はそれから少し変わった。母に感謝できるようになった。

部活動も引退を迎える最後の県大会。母が一日中試合を応援しに来てくれた。前日の夜、「明日応援に行くから」とさらっと言われて、「そうなんだ」と素気なく返したけど、本心は嬉しくて嬉しくて仕方なかった。試合中、母が見ていると思うと、少し緊張した。結果は、団体戦で優勝した。チームで喜び合った。ふと母の方を見た。母は泣いていた。また、泣かせてしまったのかなと焦った。母の涙は違った。嬉し涙だった。その涙を見たとき、今まで母が私にやってきてくれたことを思い出した。母がいなかったら、生活できないし部活動もできなかった。伝えなきゃと思った。

「ありがとう。」

母に伝えた。あまりにも唐突な言葉に母は驚いていたが、「うん、こちらこそ。」

と母は言ってくれた。文字にすればたったの十二文字。私にとっては、大切な大切な十二文字。少し照れくさかったけど、伝えられて良かった。

感謝の気持ちを伝えること。それはすごく照れくさくて温かかった。素直に言えるまで時間はかかったけど、その分成長できた。

ありがとう。

